【学位論文審査の要旨】

審査結果

本博士論文の公開審査は、2017 年７月７日（金）の午後４時～６時の間に、５号館１階 139 教室で行われた。

本論文で高く評価できる点は、取り組もうとしている新たな方向性である。人類学がフィールドワークを方法とする学問であり、そのフィールドワークが人称性や身体性に拘束されたものであるとしたら、人類学は、アクチュアリティを扱う人称的な人間科学となるはずだろう。にもかかわらず、人類学は公共的で客観的な現実（リアリティ）を追求する学問として確立されてきた。それに対し、1980 年代の実験的民族誌と『ライティング・カルチャー』による問題提起のなかには、人類学が人称的科学としてアクチュアリティを扱う学問であることを認めるべきだという方向性が含まれていた。けれども、その問題提起は、その後の議論が文化を記述する権利という「文化の政治学」の方向へと進んだことで置き去りにされてしまった。本博士論文は、その置き去りにされた問題を提起している点で、これからの人類学の議論に貢献するものとして評価できる。

しかしながら、本博士論文は、そのような問題提起を行う民族誌としては、アクチュアリティを描くための作品化や洗練化が十分ではなく、中途半端に終わっていることも否定できない。いいかえれば、方向性は挑戦的であると言えるが、結果として野心的作品とすることにかならずしも成功していないように思われる。けれども、そのことは、それだけ難問題に取り組んだ意欲的な試みであるということを意味しており、意義のある問題提起はできていること、そして進むべき方向性を示していることは十分に認められること、そして、代替不可能な関係性（単独性どうしのコモン）にはある種の「受動性の構え」が必要であるという本論文の結論はこれまであまり議論されてこなかったことであり、その独自性も評価できること、それらの点で、本論文は十分に博士論文に値するといえる。

以上の審査により、審査員一同は、村松彰子氏に博士の学位を授与することが適当であると判断した。

本論文は，CMC，特に電子メールによるコミュニケーションを考察するために，従来の言葉によるコミュニケーション研究における受け手デザインや聴衆デザインの知見を導入し，心の推測における認知プロセスとプロセスに影響を与える要因を実証的に明らかにするために，実験と調査を積み重ねて体系的に論じた意欲的な論文である．本論文の主たる成果は次の通りである．

(1) CMC 場面においても受け手デザインが存在することを，顔文字や句読記号を相手に同調させて使用する傾向があることを実験により明らかにすることにより実証した．

(2) 従来のコミュニケーション場面における受け手デザインや聴衆デザインの研究では，

その詳細な認知プロセスの実証的知見はほとんど得られてこなかった．本研究においては，CMC 場面における受け手デザインには，相手の心の推測が前提になっていることを仮定して実験を行い，心の推測における認知プロセスに関して独自の実験手法を用いて考察を展開した．

(3) 心の推測における認知プロセスにおいては，初期の共有情報と特権情報が混在する情報の精査が不十分な状態である自己中心性から，初期の推測から特権情報の影響を割り引くように自己中心性を抑制するプロセスがあることを，実験により明らかにした．

(4) 認知負荷が与えられ，心の推測に利用できる処理資源の配分が減少した場合には，自己中心性バイアスの抑制が働きにくくなることを実験により明らかにした．これは，思考や認知における二重過程理論に適合することを示した．

以上のように，CMC 場面におけるコミュニケーションの認知過程を受け手デザインの使用，自己中心性，共通情報と特権情報，処理資源，係留と調整など，従来のコミュニケーション研究の概念を用いて説明を試み，それを独自の実験により検証したことは高く評価される．

しかし，本研究分野にはまだ多くの課題も残っている．本論文でも言及されているように，現実におけるコミュニケーションは複数回の往復，ないしは長期的なやり取りが続くのが一般的である．しかし，本論文における実験では，推測を複数回行わせるような場面は扱っていない．時間経過や相互作用によって，受け手デザイン，心の推測，自己中性バイアスがどのように変化していくのかを明らかにすることは，今後の課題であろう．CMC 場面における認知プロセスのより一層の理解のためには，今後の研究の展開が期待される．

このように今後の課題は幾つか残されているが，従来のコミュニケーションの先行研究における多様な概念を関係づけるとともに，仮説を検証するために独自の実験方法を考案して地道な実験を積み重ねて得た知見は，基礎的，応用的研究として高く評価できる．平成 29 年 5 月 31 日の公開審査においても，瀧澤 純の高度な学識と見識が確認されると同時に，瀧澤 純の一連の研究がこの分野において大きく貢献していることが確認された．よって審査員一同は，瀧澤 純に博士（心理学）の学位を授与することが適当であると判断した．